

44

たかすぎしんざく
高杉晋作

面白くないこの世の中を、面白くする。



おもしろき こともなき世を おもしろく。

(辞世の句 慶応三年)

■現代訳

面白いことも特にないこの世の中を、面白くする。

奇兵隊を率い倒幕へ導く

近年の研究では、この句は辞世ではなく、死の前年には詠まれた記録があるという。だが、高杉の人生そのものは、二十八年という短さに比べて、非常に「おもしろき」ものであったといつて、差支えないだろう。明倫館で学んだものの飽き足らず、松下村塾に入門。松陰には、その卓越した見識を高く評価されていた。文久二（一八六二）年には中国・上海へ。列強の植民地のようになっている実情を目の当たりにする。

上海留学で尊王攘夷の思いを強くした高杉は、帰国後、イギリス公使館焼き討ちなど過激な行動をとるが、元治元（一八六四）年、長州は四国艦隊による下関砲撃で惨敗。攘夷の限界を知らされることになる。

二年後の慶応二（一八六六）年、倒幕の旗手となった長州藩の中心には、奇兵隊を率いる高杉の姿があった。幕府による長州征討を退けたのち、肺結核に倒れる。幕府崩壊の決定打を自らの手で加えながら、維新を見ることなくこの世を去るのは、一年後のことである。

*1 イギリス公使館焼き討ち

文久二年末、高杉、伊藤俊輔ら長州藩士が、品川に建設計画中の各国公使館の襲撃を計画。イギリス公使館を全焼させた。